

過去と現在をつなぐ名字：  
「石切山」姓と人びとの語り

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文学部社会学科文化人類学コース 公開日: 2018-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 佳会 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/00024973">http://hdl.handle.net/10297/00024973</a>

# 過去と現在をつなぐ名字

～「石切山」姓と人びとの語り～

中村佳会

- 1 はじめに
- 2 名字
  - 2.1 名字の歴史
  - 2.2 静岡県の名字
  - 2.3 入山の名字
- 3 石切山氏について
  - 3.1 分布
  - 3.2 文献に登場する石切山氏
  - 3.3 石切山氏と望月氏
- 4 石切山氏のルーツ
  - 4.1 ルーツ研究
  - 4.2 通説
  - 4.3 複数の語り
    - 4.3.1 先祖は誰か
    - 4.3.2 どこの石を利用したか
    - 4.3.3 何に利用したか
- 5 おわりに

## 1 はじめに

静岡県静岡市由比地区入山について調査を進めるうちに、私は「石切山」という名字の存在を知った。石を切る山、シンプルな名字だ。どうやら入山に多い名字で、その昔石を切り出したことに由来しているらしい。私はこの珍しい名字から、入山の歴史や文化が見えてくるのではないかと考えた。

本報告では、石切山のルーツをめぐる様々な語りを取り上げる。私たちは毎日、当然のように名字を名乗っているが、名字自体の意味やそれを名乗ることの意味を深く考える機会は意外と少ない。名字はこれから先、自分に一生付きまとうものである。結婚して名字が変わったとしても、一度でも自らをあらわす記号となった名字は自分にとって何らかの意味を持ち続けるであろう。現在の私たちが名字を持ちそして名乗ることの意味を、石切山にまつわる語りに注目しつつ考察していきたい。

## 2 名字

本節では庶民の名字獲得の経緯、そして静岡県や入山に多い名字について論述する。

### 2.1 名字の歴史

日本の姓氏は 15～16 万種類あるといわれている。個人の姓名の上半分を指し、現民法では

これらを氏と称する。丹羽基二（1981:7）によれば、姓氏については、姓、氏、名字など様々な呼称があり、苗字は常用漢字では「苗」をミョウと読まないことから名字と書くほうを正式としている。ではなぜ、これほどまでに呼称が複雑化してしまったのであろうか。

姓、氏、名字は、現在ほぼ同一に扱われているが、本来は全く別のものである。渡辺三義は、姓氏の歴史は極めて古いと述べる。大和朝以前には古代豪族の古代姓が用いられ、大和、奈良時代に身分階級を表した姓となった。姓はカバネと読み、古代貴族の家系に付随する家格や職業を示す。684年に天武天皇が制定した姓は「八色の姓」と呼ばれる、真人、朝臣、宿祢、忌寸、道師、臣、連、稻置で、官職の姓は国造、県主、稻置、別、神主、画師、薬師、日佐、史であった（1988:328）。

平安時代に入ると一族の血縁を表示する氏が登場した。氏はみだりに改変することは許されず、この規則は平安中期まで守られていた。当時、位が高い貴族は姓と氏を両方所持していたが、一般庶民の大部分は氏のみをもち、さらに遠隔地に行くほど姓氏を持たない者も多かった。平安後期には同じ氏族から分かれた支族の名として名字が発生した。渡辺（1988:331）によれば、ほとんどが居住地、所領地などの地名、つまり、名田の名からつけられたが、はじめは父子、兄弟などが別の名字を名乗ったり、居住地を変える際に名字も変えたりすることができる自由なものであった。鎌倉時代に入ると、依然として家系を誇示するための氏を併称しつつも、識別性を強調して名字を用いることが一般的になる。やがて、名字も家の名として世襲されるようになり、氏と同じようにその家から出た一族を表すようになった。戦国時代に活躍した若者が名字を名乗っていたことから、この時代にはほとんどの庶民が名字を称していたとみることができる。一方で、氏はほとんど利用価値を失い、多くは名字に転化した。しかし、中には長い年月の中で氏と名字の区別がつかなくなり、古代の氏がそのまま名字として名乗られ続ける場合もあった。

江戸時代に入ると、幕府は庶民から名字（その頃には苗字の文字の方が多く用いられていた）と刀を取り上げ、農林漁業に専念させる制度を布いた。こうして約300年もの間庶民は名字を公称することを許されなかったが、名字の代わりに屋号や職業名などで呼び合っていたため日常生活に支障は無かったと考えられる。丹羽によれば、名字公称が許されていたのは支配階級である貴族や武士と、彼らと同格と認められた神官、医者、学者、功績者などの一部である。総計して全人口の1割程度であり、名字を名乗れるようになるということは名誉や特権を得ることと同義であった。一般庶民が功績を残すなどして名字の公称を許された場合でも、名字公称の範囲は領内に限られ、全国的には通用できなかつた。一方で、名字は最高の贈り物として用いられることもあり、徳川氏は家臣に「松平」の名字を与えていた。このように名字は賜与という形で希少価値を生み出され、君臣の一体感を結ぶために利用されていたのである（1981:27）。

明治の新政は、まさに明治の新姓という字を当てはめることができる。1870（明治3）年には、公地公民の精神の下で、全ての国民が名字を称すことを許可された。幕府はこれを元に人民の戸籍作成を急いだ。山中永之佑は、当時名字が江戸時代とは異なる新しい意味を持つに至ったと論述する。つまり名字は、武士と庶民との間にあった差別を撤廃するために利用されたと同時に、国家が目指した戸数・人員の把握のための記号として変動してはならないものとされたのである。名字に関する布告は次々と出され、通称と実名の併称や、姓名の変更が禁止された。中には、租税の対象になることへの抵抗から頑なに名字を名乗らない庶民もいたが、1875（明治8）年、ついに明治政府は国民に名字を称することを義務付けた。名字を「名乗ってもよい」が「名乗らなければならない」に変わったのだ（1988:246）。庶民の中には憧れの名字公称に喜ぶ者もいたかもしれないが、長年名字を名乗らなかつた彼らは逆に戸惑い、むしろ不

便に感じたのではなからうか。私称していた者はそのまま届け出て公認してもらい、先祖の名字を知っていた者はよほどの事情がない限りその姓氏を再び名乗った。先祖の名字を忘れてしまった人びとも多く、渡辺によれば、彼らは出身地の地名や先祖の発祥地、屋号、職業名、支配者（領主）の名前、名手や神官の名字、信仰する神仏名や寺社名、瑞祥名や佳字にちなんで名付けた。中には、知識階級層に相談して適当につけてもらう者もいた。こうして幕末には約3万程度あった名字の数が、1870年代には約3倍以上に増大し、現代の名字に対する考え方の基礎が固まっていった（1988:332）。

## 2.2 静岡県の名字

静岡県は東西を結ぶ東海道、甲信に通じる各街道、さらに豊富な海路を通じて人の移動が激しく行われ、その結果名字の種類も多様になった。静岡県内だけでも4~5万種あると推定される。かつて伊豆、駿河、遠江の三国であったことから各地域の名字はそれぞれ特色を持つ。一例をあげると、東部には甲斐に栄えた一族の名字が多く、中部には甲斐や信濃、そして西部には三河、尾張、信濃の流れを汲む字が多い。渡辺三義によれば、県内の姓氏ランキングは上から鈴木、渡辺、望月、杉山、山本と続くが、旧三国別にみるとこのランキングも大きく異なる（1994:44）。たとえば遠江では1位、駿河では2位とされている望月氏は伊豆においては79位と非常に少ない。これらはそれぞれの土地をめぐる人の動きや、地理的、歴史的背景と無関係ではないだろう。また、現存する姓氏の大部分は地名からきているといわれているが、県内にも姓氏の発祥地となった地名がいくつか存在する。たとえば、東部は伊東や富士、中部は安倍や興津、西武は浜名などがあげられる。ただし、同一地名は全国に複数あるため、これらが全て県内地名より発祥したとは断言できない。一方で、県内で発祥した後に、赴任した先の県外で繁栄した姓氏もあり、江戸初期、県内で大名となった井伊、岡部、安倍氏もこれに該当する。

## 2.3 入山の名字

入山全体で最も多い名字は望月であり、石切山、佐野、鈴木と続く。望月氏は静岡全体で見ても多いが、入山では全世帯の4割以上を占めている。次は、部落別に姓氏の特徴を見ていきたい。入山は、中村、北山内、南山内、向山、宮の前、諸木沢、舟場、香木穴、福沢、桜野、檜野の11部落から成っている。

表1 入山の部落別の名字分布（数字は世帯数）

	望月	石切山	佐野	鈴木	宇佐美	平野	他の名字
中村	6	8	1	0	0	0	2
北山内	14	3	1	0	0	0	5
南山内	15	0	0	8	1	0	13
向山	5	11	0	0	0	0	0
宮の前	4	1	0	0	0	1	13
諸木沢	15	9	3	1	0	0	8
舟場	17	1	0	0	0	0	3
香木穴	8	0	0	0	0	6	0
福沢	1	0	7	0	0	0	2
桜野	2	0	0	3	5	0	1
檜野	3	0	1	0	4	0	2

出典：2017年度入山自治会会員名簿より中村作成

表1からわかるように、入山には特定の部落に集中している名字がある。たとえば佐野氏は福沢に多く、宇佐美氏は桜野、檜野、そして平野氏は舟場に多い。このような特徴について木村礎は、村や坪といった小地域に存在している同姓集団が、元をただせば同族団だといった事例は全国的にきわめて多いと論述している(1998:216)。では、本調査が対象とする石切山氏は果たして同族関係にあるのだろうか？彼らは向山、諸木沢、そして中村に集中している。向山在住の石切山 A 氏(男性、63 歳)は、石切山氏の起源が石を切り出す作業集団にあったと考えた上で、以下のように語る。

石切作業はかなりの重労働であったはずなので、一族だけではなく何軒もの家の人びとが作業をし、かかわった複数の人びとが名字をもらったのだろう。よって、現存する石切山さんたちが皆血縁関係にあるとは考えにくい。

同姓集団とはいえ、名字獲得までの経緯によっては同族団と断言できない場合があるようだ。入山内の他の名字についても、各々の関係性を詳細にみていきたいところであるが、それらは今後の課題としたい。

### 3 石切山氏について

本節では、石切山氏の分布やその希少さについて明らかにする。あまり文献に登場しない名字ではあるが、由比地区の郷土史や現地住民の語りを元に、石切山氏の概要をまとめる。

#### 3.1 分布

石切山という名字は、伊藤みろ『日本の家紋と姓氏』、大田亮『姓氏家系辞典』、静岡県姓氏家系大辞典編纂委員会『静岡県姓氏家系大辞典』、高澤等『家紋の辞典』、丹羽基二『姓氏の語源』、渡辺三義『名字にみる静岡県民のルーツ研究』等、数々の権威ある辞典にも記載がないことから、非常に珍しい名字の一つであるということがわかる。今回話を聞いた石切山氏らは、進学や就職で入山を出て珍しい名字と指摘されるうちに、石切山という名字の特殊性を意識し出したと語る。石切山の読み方が分からない人にも数多く出会ってきたらしく、これらの体験も石切山姓の希少性を裏付けているといえよう。

NTT タウンページ株式会社によると、2016(平成28)年12月の時点で静岡県において56戸の石切山氏がハローページに登録しているが、近隣の山梨県や長野県では1戸も登録者が見つかからない。県内の内訳としては静岡市葵区・駿河区に2戸、静岡市清水区に44戸、富士宮市、御殿場市、富士市、沼津市に各1戸、そして下田市に6戸ある。清水区内では44戸中39戸が由比地区在住、由比地区内では39戸中28戸が入山在住である。登録していない者を考慮すれば数は当然変動するだろうが、近隣の県や県内の西部には見つからず、しかもこれほど入山に集中しているという点には驚きである。入山内の石切山氏の分布については、表1を参照されたい。

次に、入山における石切山氏の推移について述べる。手島日真は、1970年頃の時点で由比地区には54戸の石切山氏があり、そのうち36戸が入山にあったと論述する(1972:784)。入山自治会会員名簿によれば、2016(平成28)年10月31日の時点では33戸の石切山氏が入山に在住している。45年近くたっても戸数はさほど大きく変動していないようであるが、入山全体が過疎問題を抱えているということもあり、世帯あたりの人数は徐々に減少しつつあるようだ。静岡市立入山こども園の職員は、現在こども園に石切山という名字をもつ子どもは1人もいな

い上に、ここ数年で石切山家に子どもが生まれたという話も聞かないと語る。人口流出や少子高齢化によって、入山に石切山氏が密集している状況も変化しつつあるのかもしれない。

### 3.2 文献に登場する石切山氏

手島日真によれば、石切山氏が初めて文献に登場するのは、林香寺の過去帳のなかである。1862（文久 2）年頃に入山村石切山文右衛門とあり、彼は諸木沢の文次郎と呼ばれていた（1972:784）。当時は江戸時代で、庶民の名字公称が禁じられていた時代であったので、彼らは何らかの理由で名字公称を許されていたと推測できる。文次郎の玄孫にあたる石切山B氏（男性、歳、諸木沢在住）は、文次郎の戸籍が江戸時代末期のもので、石切山家で最も古いと語る。それ以前の先祖の名前はわからないそうだ。さて、1888（明治 21）年に公布された市町村制に準じて、翌 1889（明治 22）年に由比宿と 10ヶ村（北田、町屋原、今宿、寺尾、東倉沢、西倉沢、西山寺、東山寺、阿僧、入山）が合併し、文次郎の長男にあたる石切山純一（諸木沢）は、35歳の若さで由比地区の初代町長に選出された。



図 1 石切山純一氏

出典：『由比町史』

彼の家は名家級であったということから、入山において、石切山氏が当時から力をもっていたということがわかる。

### 3.3 石切山氏と望月氏

入山で数多く見られる望月氏と石切山氏であるが、両家の間にはどのような関係性があるのだろうか。渡辺三義は、望月氏の発祥が信濃国望月村で、清和源氏信濃判官滋氏の後裔、広重が望月を称したことに由来すると論述している（1988:249）。ここで注目したいのが家紋である。清和源氏の家紋は七曜、下り藤丸、九曜、花菱、井桁、鳩酸草、鷹の羽紋であるというが、これらのなかで井桁と鷹の羽紋に関連する以下図 2、図 3 の家紋が、なんと入山の石切山氏の墓石にも確認できた。



図2 丸に違い鷹の羽



図3 丸に井桁

出典：『日本家紋大鑑』

図2は由比地区に住む望月家のなかにも見られるという。図3のような井桁の家紋は、全国でも圧倒的に静岡県に多い。家系の大きな流れを探るには姓氏よりも家紋の方が正確だという説さえあるらしく、この接点は石切山氏が望月氏の流れを汲むという仮説を生み出した。さらに望月良英によると、3.2 で登場した石切山氏の始め、文次郎と妻かくは望月家に両養子として迎え入れられた(2010:153)。文次郎が迎え入れられた望月家は、元々武田氏に属しており、後に諸木沢へ移り住んだ一族であるようだ。この家からは明治維新の頃に由比地区の地域開発、学校教育、山間地開墾に勤めた人物、望月幸平が出ている。由比地区のなかでも有力な望月家に石切山の初めが見られるという点は、非常に興味深い。

入山の住民は、今まで両氏間に対立があったという話は聞いたことがないと語る。旧姓望月の石切山氏や、旧姓石切山の望月氏も多数おり、両氏は婚姻関係を結ぶ間柄にもあるということが分かった。このような関係性から推測すると、望月氏の内部分裂によって一部が石切山氏となったというストーリーは考えにくい、何かをきっかけに望月氏のなかから石切山を名乗り出す者が出現した可能性は高い。

#### 4 石切山氏のルーツ

次に、聞き取り調査で得た情報を分析し、石切山氏のルーツについて考察する。

##### 4.1 ルーツ研究

ルーツを研究する上では、名字の型、寺や神社、墓、戸籍、地名、位牌などが手がかりになってくる。渡辺三義は、これらの資料をできるだけ多く収集して整理し、さらに先祖の時代の歴史や、その地の地形、因習などと照らし合わせながら推理することが望ましいと論述する(1988:321)。石切山 A 氏のご祖父(1896 年生まれ)はルーツ研究に大変熱心で、5~10 年ほどかけて約 15 石の墓石を元に過去帳を作成した。過去帳とは、死没者の戒名や死没年月日、俗名、年齢、戸主との続柄などを記載したものである。



写真1 石切山 B 氏のご祖父が作成した過去帳（中村撮影）

古い墓石を読み取る手法については、まず墓石を洗って墨を塗り、それから版画のように写す拓本が行われていたと考えられる。元々過去帳はお寺と自宅に一冊ずつあったが、焼失してしまったため一から作り直したそう。過去帳のなかで最も古い祖先は、1658（万治元）年と記されている。入山において、石切山のルーツに関する話は口伝が中心となっているようであったが、上記のような手法を行えばより正確なルーツの解明が実現するかもしれない。

## 4.2 通説

入山の住民の多くは、全国に点在する石切山氏のルーツが入山にあると確信している様子であった。さらには昔駿府城築城のために石を切り出し、その功績が認められた者が石切山の名字を受けたという説が通説となっている。石切山家のなかでも名家といわれる石切山 B 氏も、特にルーツについていい伝えがあるという訳ではないが、上記の説が一般的であり、まわりの人びとが口々にいっているから自分もそう認識していると語る。しかし、この通説に関して証拠となる資料がある訳ではなく、もはや伝説に近い形で現在でも語り継がれているようだ。以下では文献資料を用いてこの通説を分析していく。

まず、駿府城は室町期から江戸期の城であり、現在の静岡市葵区駿府公園、城内町、追手町、駿府町にまたがる。1582（天正 10）年、徳川家康は武田氏を追い出し、本拠地を浜松からここに移して大規模な築城工事を行った。小和田哲夫によれば、1585（天正 13）年 7 月に工事が開始され、1589（天正 17）年 4 月には天守閣を含めての全工事が完了した。完成の翌年、家康は江戸に転封されたが、後の 1607（慶長 12）年、家康は將軍職を秀忠に譲った後再び駿府城に戻った。この際隠居城として拡大、改修する命令を発したが、これは第二の築城といえるほど大規模なもので、かなりの金額がかかる大工事であったらしい（1983:37）。ここで注目したいのは、石切山 A 氏のご祖父が作成した過去帳（4.1 参照）の年代である。過去帳のなかで、最初に登場する石切山氏は 1658（万治元）年に登場していた。これと照らし合わせてみると、第二の築城への貢献が名字獲得に関係しているという通説は、時期的にも納得できるのである。

次に、石の利用について考えてみる。手島日真は、石切・石工業について次のように記述している。



山から石を切り出すのが石切業、その石で様々な細工をするのが石作り、石匠、石工で、後世、これを単に石工又は石やと呼んだ。石切・石工業は遠く神代から起り、兵器、家屋、器物、門戸、石棺などを作り、更には漢、韓との交通が開けてからは、巧みな工人が渡来して、仏像、碑彫、石宝塔、石橋などの技法を伝えた。かくて石工業は勃興し、諸像、誠廓、石畳などの彫工が分業するまでに至った（手島 1972:782）。

当然築城の際にも、これらの技術は利用された。さて、石垣奉行の命を受けた駿府城周辺の名主たちは、村人の案内を受けながら山の奥地や川の上流へ入って行った。しかし、石垣石の条件は厳しく、風化をしない良質な石であること、そして工作しやすいことが絶対条件である。駿府に最も近い安倍川水系の石は悪質であったがために、採石は行われなかったと考えられている。一方入山の石が、大変良質で昔から利用されてきたことは明らかだ。これに関しては 4.3.2 を参照されたい。石切山の先祖がどこで何時頃から石切をしていたかは全く不明である上に、石を切り出した跡などは見つかっていない。しかし、家康が由比地区まで鷹狩りに来ていたという記録はあるため、その際に入山の良質な石に目をつけたということは十分想像できる。

もう一つ大きな問題は、入山から駿府までの距離にあったのではなかろうか。駿府城築城の際には、材木にしても石垣石にしても、諸大名が切り出しから運搬まで負担することになった。小野田護によれば、石垣用の石は小さいものでも約 100 キロで、実際 100 キロ以上の石がほとんどであった（1983:169）。機械力一つなく道路も舗装されていないこの時代に、10 万個以上もの石垣石を運んで来るというのは、相当厳しく苛酷な作業であったであろう。さらに、慶長期の工事が一年未満で完成している事実にも驚かされる。これらを踏まえて、諸大名の石垣石調達に関して小野田は以下のように考察する。

今日まで、駿府城の石は伊豆から来た、大阪城の残石を運んだなどの説があった。これは確かなことかもしれない。しかし短日時の突貴工事とあれば、そんな遠方から運んでいる時間は無く、むしろ地元駿府周辺で調達するのがごく自然であり道理だろうと考える。まして駿府の背後には連山があり、周辺には西に安倍川と藁科川、東に長尾川がある。山や川の流域に石のあることは常識だ（小野田 1983:170）。

入山から駿府城は直線距離にして約 28.7 キロある。入山の住民の話によると、昔は陸路が発達していなかったため、石を運搬するには由比川が使われたようだ。石切山 C 氏（男性、諸木沢在住）は、薩埵峠を越える運搬が困難を極めたため由比川から海へ下し、船で用宗まで運んだのではないかと推測する。このように駿府からは少し距離があるが、由比川があることによって運搬の問題が解決されたならば、入山の石を駿府城に利用することも可能であったと考えられる。

### 4.3 複数の語り

石切山氏のルーツを明らかにするため現地住民に聞き取り調査を実施したところ、通説の補足となる情報や、また別の説が浮かび上がってきた。それらを分類すると表 2 のようになる。

表 2 石切山氏のルーツに関する諸説

① 先祖は誰か	良質な石に目をつけて入ってきた石切職人（高遠藩、甲斐の国、岡崎）
	逃げ込んできた落ち武者（関ヶ原の戦いの西軍、源氏の落人）

	元々石加工技術を持っていた現地住民
② どここの石を利用したか	川の石
	山の石
③ 何に利用したか	駿府城
	久能山東照宮
	由比本陣

聞き取り調査より中村作成

以下では現地住民の語りを紹介すると共に、適宜文献資料で補いつつ考察する。

#### 4.3.1 先祖は誰か

望月氏の一部が石切山氏となったという説が現地において語られることは無かったため、各資料に現れる両家の接点については本文の 3.4 を参照されたい。石切山氏の先祖に関する現地住民の見解は、大きく三つに分類できる。第一に、入山の良質な石に目をつけて移動してきた石切職人を先祖とする説、第二に、入山に逃げ込んできた落ち武者を先祖とする説、そして第三に、元々石加工技術を持っていた現地住民を先祖とする説である。

ではまず、第一の説を取り上げる。

##### D 氏（男性、75 歳、由比地区阿僧在住）

現在の長野県にあたる高遠藩から石工が入ってきた。

##### E 氏（男性、76 歳、宮の前在住）

戦国時代頃、入山の石を切り出して石垣をつくるために、甲斐の国から石切工が入ってきた。

##### 石切山 F 氏（男性、中村在住）

元々岡崎の石切場で作業していた人びとが入山に入ってきた。

D 氏の語りに登場する高遠藩は、全国の石の産地に石工を派遣して石垣などを彫らせ、藩政の糧にしていたという。由比地区にも派遣された記録は残っているが、それは 1800 年代のことであるから、1600 年代の駿府城や久能山東照宮を作る際に石を切り出したという通説とは食い違いが生じてしまう。次に E 氏の語りについてであるが、由比川沿いに走る入山街道は甲州に通じ、江戸時代より人馬の往来が頻繁であったようだ。よって甲斐の国から人が流れてきたことは容易に想像できる。最後に、石切山 F 氏の語りに登場する愛知県岡崎市は、全国でも有数の石材産地として古くから知られてきた。佐藤興平、仲井豊（1991）によれば、徳川家康が青年時代を過ごした岡崎城（1452 年に構築開始）の石垣の大部分が、岡崎市東方の花崗岩体から採掘された原石から作られていた。岡崎城築城の際には大阪方面から石工が招かれ、彼等はその後城主や寺院に保護されながら城下に石屋町を形成したという。江戸時代に入ると、岡崎城は本多、水野、松平など譜代大名の居城となった。後の駿府城築城の際に、岡崎の石切集団に再び声かけられたという記録は見つからなかったが、その可能性は充分にあるといえるだろう。そして、駿府により近い場所で良質な石がとれるとどこかと探した結果、入山に辿り着いたのかもしれない。

第二に、入山に逃げ込んできた落ち武者を先祖であるとする説である。昔、入山は不便な地

である上に集落の人数が少なかったため、役人が租税を取りに入っていない不入計の土地であった。この際「入りによまず」といわれていたのが、「いりやまず」または単に「いりやま」と変化していったという話もある。役人が入って来ないというのはつまり、落ち武者にとっては逃げ込むのに好都合ということである。以下は、このように逃げ隠れしやすい入山の特徴を踏まえた仮説である。

#### 石切山 G 氏（男性、40 歳、諸木沢在住）

石切山のルーツに関して確かな事実はわからないが、聞いた話によると昔関ヶ原の戦いで敗北した西軍が入山に流れてきて、駿府城築城のために石を切り出し、石切山という名字をもらったらしい。個人的にインターネットで調べてみたところ、関西に石切山に関連する地名が見つかった。関西地方に石切山さんがいるのかどうか気になるところだ。

#### 石切山 C 氏

昔、源氏の落人が由比地区に逃がれてきたとき、人目のつかない桜野に身を潜めて農業で生計を立てていた。当時は武士と商人しか名字を持たない時代で、彼らも当然名字を持たなかった。その後、石を切り出した功績が認められて、彼らは石切山という名字をもらった。しかし、他の農民に比べていち早く名字を得たにもかかわらず、石切山氏が全国的に広まり有名になることはなかった。これは元々落人という立場だったことが、原因なのではないだろうか。

まず石切山 G 氏の語りについてであるが、大阪府中東部、東大阪市の一地区には石切という地名が存在する。石切は生駒山の石を切り出したことに由来し、1583（天正 11）年大阪城築城の際にも、石をここから搬出したと伝えられている。入山から遠く離れた大阪の地で石切山氏が発祥したと考えるならば、当然気になるのは大阪における石切山氏の分布である。NTT タウンページ株式会社によると、2016（平成 28）年 12 月の時点で大阪府においてハローページに登録する石切山氏は一戸もない。となると彼らは入山に流れてきたのだろうか。石切山 G 氏の語りに登場する関ヶ原の戦いは、1600 年（慶長 5）年 9 月、徳川家康の率いる東軍と石田三成を中心とする西軍によって、美濃国関ヶ原で行われた戦いである。東軍が大勝し、西軍に加わった諸大名は厳しい処分を受けた。当時の西軍が入山に逃げ込んできたという記録は見つからなかったが、その際石切で発祥した石切山氏が入山に流れてきたり、はたまた石切とは無関係な大名が流れてきて、入山で一から石加工技術を身に付けたりしたのではないかというのが石切山 G 氏の仮説である。もし後者が正しければ、一度は家康によって追いやられた西軍の一部が、後に入山の地でまさにその家康による駿府城第二の築城事業に携わり（4.2 参照）、さらにそこで新たに石切山の名字を得たという壮大なストーリーが浮かび上がる。

さて、石切山 C 氏が語るように、石切山家からは全国的な著名人が 1 人も出ていないようだ。石切山氏先祖は名字獲得後、石職人として活動の場を広げることもせず、入山内に留まって農業を営み続けた。それが落ち武者という身分を隠すためであったという話は納得しやすい上に、今日、石切山氏が入山に密集している状況と結びついているという意味で有力である。また、一度は落ち武者となって名字を無くした者が、再度功績をあげて名字を獲得したという逆転劇も面白い。

そして第三に、元々入山に住んでいた人びとを先祖とする説を紹介する。

#### 石切山 H 氏（男性、71 歳、諸木沢在住）

入山は段差が急な地域であるため石積みをつくる技術が発達した。平らな地域にはそのような技術はないので、昔石積み要員として入山の人びとが呼ばれた。そこで功績が認められて石切山の名字を受けた。



写真2 入山の石垣 (中村撮影)

写真2のように入山では至る所に石垣が築かれている。自然の石がそのまま積み上げられた様子で、どれも大変精巧な作りをしていた。現地住民にとって石垣は、子どものときから毎日見ている景色の一部である。本調査では、巧みな石垣を作り上げた技術が、自らのルーツと無関係とは思えないと語る石切山氏の姿が目立った。この技術が外部から持ち込まれたものなのか、はたまた元々入山にいた住民が複雑な地形を生き抜くために試行錯誤を繰り返して身に着けたものなのかはさておき、現存する石垣は、我々に石切山氏誕生との関連性を想起させる。

#### 4.3.2 どここの石を利用したか

4.2 通説で述べたように、入山の石を切り出し由比川に流したという話は、現地住民の間で共通認識されていた。しかし、詳細を聞いてみると、川と山どちらの石を利用したかという点に関しては見解が分かれている。

##### I 氏 (女性、65 歳、旧姓石切山、清水山切在住)

由比川の上り口である桑木穴の石を切り出して、それを竹でできたそりのようなものをつかって由比川に流し、鞠子の石切場まで運んでいたといい伝えられている。桑木穴あたりの川には、石がごろごろと転がっており、水が少ないときにはとるのが容易かった。私が小学生くらいの頃には、業者が来て火薬を用いて石を割っていた。一般人も「のみ」のような道具をつかって石を切り出し、段々畑をつくる際などに利用していた。

##### 石切山 A 氏

城をつくるとなれば、良質な石を得るために入念な地質調査が行われたはずだ。石を切り出した跡などは見つかっていないものの、由比川より東側の山は、砂礫や砂でできたかたい地層になっているので石加工に適する石が切り出せる。よって、由比川の東側にあたる諸木沢、向山の人びとが石切作業を行い、その結果石切山の名字を受けたと考えられる。これは現在でもやはり両部落に石切山氏が多く、本家も集中しているという状況に繋がっているのではないだろうか。由比川の西側は農業には適する柔らかい地質であるが、その昔は地滑りや土砂崩れが多発した。現在では土地の整理が落ち着いたことで西側に住む者も増えたが、石切山の本家はない。

由比町史編さん委員会によると、I氏の語りに登場する二級河川由比川は、由比町を北から南に流れ駿河湾に注ぐ全長約7キロメートルの急流河川である(1988:133)。望月良英は由比川の石について、風化しにくく、また沙岩で細工に適した調度良い硬さがあると論述する(2010:33)。そのため、由比地区の庭石や石垣、記念碑、古墳、灯籠など様々な石造物に使われてきた。昔は大きな石がごろごろ転がっていたが、良質なばかりに採られすぎてしまい、今ではとうとう大きな石が無くなった上に採りすぎによって侵食してしまった地域もあるそうだ。駿府城築城となれば大量の石が必要とされたはずなので、そこで採り尽くされてしまったとすれば侵食の説明もつく。

次に石切山A氏の語りについてであるが、土隆一によれば、由比川溪谷に沿いには入山断層が走る。断層の東側(下盤側)には更新世の100~50年前の蒲原礫岩層と40~30年前の礫層があり、これらは固く湿った地質である。一方西側(上盤側)には鮮新世の浜石礫岩層があり、泥岩や砂岩など様々な堆積物から成る(1981:53)。部落別の石切山氏の分布については表1を参照されれば明らかであるように、確かに諸木沢と向山に集中している。石切山氏の本家はそれぞれ入山内で移動を繰り返してきたらしいが、墓に刻まれた年などから推測すると、駿府城築城の時期には由比川の東側にいたようだ。地質学的要因と人の移動が結びついているという点でこの説は大変有力である。

#### 4.3.3 何に利用したか

多くの人びとが、駿府城の石垣に利用したと考えている。これに関しては、本報告の4.2通説を参照されたい。しかしなかには、静岡市内の他の建造物に利用されたと考える住民もいた。

#### 石切山H氏

江戸時代の初め久能山東照宮を作る際に石積み要員として入山の人びとが呼ばれ、そこでの功績が認められて名字をもらった。

#### 石切山J氏(女性、76歳、宮の前在住、旧姓望月)

昔由比川の桑木穴あたりの支流でとれた石を、由比本陣内の石垣に利用したことが石切山氏のルーツに関係している。

まず石切山H氏の語りに登場する久能山東照宮は、静岡市駿区根古屋の久能山に鎮座しており、祭神は徳川家康、相殿に豊臣秀吉、織田信長を祀る。1616(元和2)年家康が駿府城で没すると、遺命によってこの地に神祭にて葬られ、翌17年に工事が完了した。時期が駿府城とさほど変わらないため、駿府城築城の際に用いられた入山の石がよほど好評で、数年後久能山東照宮を建設する際に再び声がかかった可能性も高い。

次に石切山J氏の語りについてであるが、望月良英によれば、由比本陣は江戸時代に大名や役人が宿泊した幕府公認の宿駅である(2010:14)。なかでも馬の水飲み場として使われた場所には立派な石垣があり、これは1800年代初旬に高遠藩出身の石工が由比川の石を用いて作成したものであるそうだ。4.3.1述べた高遠藩の説と合わせて考えれば納得できる上に、何より由比本陣は入山から距離が近いいため運搬の問題を考慮してもかなり有力な説であるといえる。

## 5 おわりに

日本において名字は古くから存在したが、名字をもつことの意味は近代化の流れと共に変化

してきた。当初は身分や血縁関係を示すために用いられ、その後名字を名乗ること自体が名誉とされていた時代があった。明治に入ると、国民の数を把握するための記号として広く用いられるようになった。こうして庶民も含めて国民が名字をもつことを義務づけられ、勝手に変えたり併称したりしてはならないという現在でも適用されるルールが定まったのだ。このような流れを経て現存する名字は、国家が国民を管理するための記号である以上に、私たちにとって何らかの意味をもつのではなからうか？

調査以前、私は入山に住む石切山氏は共通祖先をもつと思いついてきた。同姓であるということが同族意識につながっているのではないかと予測し、そこに個人が名字をもつことの意味を見出そうとしていた。しかしここで改めて注意したいのは、同姓集団が必ずしも同族団ではないという点である(2.3参照)。なぜなら血縁を示す氏と違って名字の発祥は地名や官職名などであり、同じ地名、同じ官職についた人は無数に存在するからだ。今回調査をした石切山氏も、希少で入山に固有な名字にもかかわらず、系譜上にも彼等自身の語りにも共通祖先の存在はみられなかった。名家と呼ばれる家同士も、昔から仲人をやり合うほど親密な関係性があったというが、血縁関係はないと断言している。どうやら名字は、同族意識をかきたてて同姓同士を団結させる、といった単純な機能を果たしているわけではないようだ。

入山では、石切山氏にまつわる様々な歴史が語られていた。石切山氏らだけではなく、住民の多くが石切山という名字と入山を結びつけて考えているのである。彼らの語りに登場してきたのは、良質な石が採れる恵まれた地質、運搬に利用された由比川、入山街道を往来した人びと、役人が入って来ることができないほどの奥地であったからこそ入山を選んで逃げ込んできた人びと、そして、段差が急な地域だからこそ発達した石積みの技術、等々である。これらと結びつけられる石切山の由来はどれも確証があるわけではなく、正しい歴史とは断言できないだろう。

重要なのは歴史学的な正しさではない。彼らが、石切山という名字をこれらの地理的・歴史的要因と結びつけ、さらにそれを現残する石垣や、石切山氏の分布と照らし合わせて納得しているということが重要なのである。さらにここで注目したいのは、たった一つの説がいい伝えられてそれを皆で信じ込んでいるのではなく、複数の説が存在しているという点である。これは、石切山の先祖が各々己の名字の由来について考察し、語り継いできたということ、そしてそれらが他の住民たちにも共有されてきたことのあらわれだ。これらの諸説一つ一つに耳を傾けることで、石切山という名字が各々の歴史語りを支えているということに気付く。名字は、文献には残らぬ歴史を地域住民がそれぞれ編纂し、語り継ぐためのキーワードとして大きな役割を果たしているのである。石切山という名字が希少で入山に固有であるから、より現地の歴史と結びつけやすいのかもしれない。しかし、どれほど有名でありふれた名字にも何らかの由来があり、今日に至るまでの歴史的背景がある。こうした過去に目を向けるということは、自分が現在ここに存在する由縁を知ろうとすることと同義である。名字は、書類に書いて提出するための単なる記号として存在するのではなく、人びとが語る過去とそれを語る現在をつなぐ役割を持つのだ。

## 謝辞

本調査を実施するにあたって、多くの方々にご協力いただきました。質問にも熱心に答えてくださり励まされる思いでした。私たちを温かく迎えてくださった由比地区の皆様にご心から感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

## 参考文献

小和田哲夫・小野田護・杉山元衛・黒澤脩

1983 『家康と駿府城』静岡新聞社。

木村礎

1998 『村を歩くー日本史フィールドノート』雄山閣出版社。

佐藤興平・仲井豊

1991 『岡崎みかげー領家帯の両雲母花岡石』実業公報社。

小学館

1994 『日本大百科全書(ニッポニカ)』ジャパンナレッジ(オンラインデータベース)(2017年7月6日取得、<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000131325>)。

高澤等

2008 『家紋の辞典』東京堂出版。

手島日真

1972 『由比町の歴史ー下巻』由比文教社。

土隆一

1985 『静岡県の自然景観ーその地形と地質』第一法規出版。

丹羽基二

1981 『姓氏の起源』角川書店。

能坂利雄・菅英志

1979 『日本家紋大鑑』新人物往来社。

望月良英

2010 『ふるさと「ゆい」郷土史・文化財 源藏先生講義録』株式会社エスケイピー。

山口裕子

2011 『歴史語りの人類学 複数の過去を生きるインドネシア東部の小地域社会』

山中永之祐

1988 『日本近代国家の形成と「家」制度』日本評論社。

由比町史編さん委員会

1989 『由比町史』静岡県由比町教育委員会。

渡辺三義

1988 『静岡県の名字』静岡新聞社。

渡辺三義

1994 『名字にみる静岡県民のルーツ研究』静岡新聞社。

Google マップ

(2017年7月17日取得、<http://urx3.nu/GluC>)。

NTTタウンページ株式会社

2017 『ハローページ 個人名』西日本電信電話株式会社。

NTTタウンページ株式会社

2017 『ハローページ 個人名』東日本電信電話株式会社。